

徳川竹姫の婚礼と嫁入本

北 條 秀 雄

一

書物が贈答につかわれた歴史は古い。神仏への献納本、奉納本も広義の贈答本といってよからう。帝王君主を始め、あらゆる権威者への献上本、貴族豪族間の贈答本、一般の手工産がわりの贈答本、識者知友への贈呈本など、贈答本の種別は限りもない。

これらの贈答本が装幀に力をそそいで、漸次豪華になってゆくのも当然のなりゆきと考えられる。

西欧での献上本、贈答本には羊皮紙をつかい、金銀其他の色インクで飾りたてた宗教書、色鮮やかなオーナメントを施した詩集、総革表紙、鋌打ちの歌謡集も珍らしくない。ウィリアムブレークの豪華本も貴族富豪の注文による贈答本として作られたのであろう。

奈良朝から平安朝にかけて行われた奉納写経も装幀美術の粋をつくした奉納本である。紺紙金銀泥の写経、あらゆる高級料紙、切継色紙、研をきそう下絵、胡蝶綴、粘葉綴等の技巧駆使等も贈答本を主体として発達した装幀の種々相と考えられる。

中世から近世へかけて行われた奈良絵本、近世初頭の嵯峨本、特

に光悦本は個人保存用の注文もあっただろうが、やはり注文の多くは貴顕、富豪間の贈答本、嫁入本としてのそれであったと考えられる。

更級日記の作者が関東から上洛したての少女時代に、田舎より上洛中の伯母から沢山の草紙類をもらって欣喜雀躍した話は誰でも知っている。彼女は櫃入りの源氏物語、ざい中将、とをぎみ、せり河、しらら、あさうづ等を贈られたと書いている。これらは伯母なる人の嫁入本として愛蔵されていたものかも知れない。

嫁入本といっても、本人が娘時代からの愛蔵本、贈答本がそのまま嫁入本になったものもあろうし、親が結婚にさいして特別に用意してくれるもの、親戚知友がお祝いに贈ってくれるものもある。

寛永十八年、飛騨高山の照蓮寺へ降嫁した佐奈姫は、東本願寺法主宣如上人の娘であるが、彼女の嫁入本の中で、次の三部が高山の歎喜寺に現存している。それは、ときは物語一卷、秋月物語二巻、滝口物語一卷である。おそらく源語とか伊勢とかいった古典も最初はあったと思われるが、前記三部の如きは室町末期から近世初期への草紙の好みをあらわしていて興味深い。これらは当時の現代小

説だったからである。

横山重氏蔵の特別大形本の堪忍記は確かに献上本として特別に造本装幀されたものと思われる。この本は料紙も立派であるが、題簽には金砂子の散らしがあつて、誰かの嫁入本として用いられたものと考えても不自然ではない。この堪忍記は絵入で、刊記は次のようである。

万治二己亥三月吉日 瀧 庄三郎

北大の国語国文研究（昭和四十二年六月、三七号）には、佐々木孝二氏が「近世初期の物語双紙考」と題していろいろの献上本をあげている。正保四年、吉良若狭守から亡父の遺物として兼好筆の伊勢物語が將軍家へ献上。承応元年尾邸より絵草紙が將軍家へ献上。明暦二年、尾張五郎袴着のみぎり、將軍家より派遣された阿部豊後守が、小鳥、絵草紙、お菓子などを持參贈与。寛文四年、女院より撰家門跡集写の源語が將軍家綱へ贈与。寛文六年、水戸光圀より御台所へ頓阿筆の後拾遺集が献上。このほか幾種類かの贈答本、下賜本のたぐいがあげられている。

貴族、大名間の贈答本はやはり古典が中心で、まれに定評のある擬古物語、お伽草紙、教訓的な仮名草子などが加わるのが近世初期の一般的な風潮と考えられる。しかし、一般庶民階級となると多少違って来る。もちろん定評ある古典ものもあるが、もっと実際のな書物も入って来るのである。三田村鳶魚編の「西鶴輪考」三に木村仙秀が次のような追記をしている。川越市の旧家榎本弥左衛門の覚書「延宝八年九月二十六日に娘榎本お竹十四才にてよめいり仕候に

付、異見状之事」の中に、

一、よめいりの時為持越候書物、七品、一は女鏡、二、大和西銘、三、廿四孝、四、長者教、五、心学けんせう、六、今川、七、自心養記、此七品也。本を此道に日々によみ候て、こうしやくは亭主に可尋候。徳道仕候はば、上氣しづまり、心おちつき、病いでまじく候事。

とあるというので、これらは商家へ嫁入る娘の教養として持参させた嫁入本である。

二

私は近世の婚礼、葬儀に関心を持っているが、そのうち近世初期の代表的な婚礼の一つ徳川竹姫の場合を抄出してみたいと思う。竹姫が娘時代から嫁入りまでに贈られた本は一体どんなものであったろうか。

さて、竹姫というのは五代將軍綱吉の養女である。綱吉の側室に「北の丸」さまと呼ばれる人がある。彼女には子供がなかつたので、その姪にあたる清閑寺中納言の姫君を綱吉の養女として江戸にむかえ、北の丸御殿で養育することになった。これが竹姫である。時に宝永四年、竹姫四才のみぎりである。

さて、「常憲院殿（綱吉）御実紀」宝永五年七月二十五日の条を見ると、次の記事がある。

廿五日、清閑寺中納言瀧定卿息女竹姫の方を養はせ給ひ、松平肥後守正容の長子久千代正邦に定婚の事仰出さる。これは大典侍の

局の姪にておはしければ、御台所殊更申こはせ給ふによれりとぞ聞えし。この事により、尾邸には大久保加賀守忠増、水邸には井上河内守正岑、紀邸には土屋相摸守政直御使す。三家の方々並に肥後守正容まうのぼり拜謁す。正容には御手づから熨斗鮑を給ふ。

竹姫が江戸へ下った翌年、彼女五才の時であり、これが最初の婚約である。彼女はこのあと婚約者に先立たれ、更に第二回の婚約者にも先立たれ、第三回の婚約者島津継豊の後妻に嫁入ったのは実に彼女二十六才、享保十四年、八代將軍吉宗の治世であった。

さて松平肥後守正容の長子久千代正邦と婚約がなつたのは、宝永五年七月であるが、九月六日、松平父子は登城して竹姫の降嫁を謝して、数々の献上物を贈った。実紀に次の如くある。いわゆる結納である。

六日、松平肥後守正容長子久千代正邦を引つれまうのぼり、竹姫君降嫁を謝し奉る。正容より銀百枚、時服十、正邦より銀二百枚、時服十献す。御盃たまはり、正容に來國俊の御刀、正邦は左吉貞の御刀下さる。正容より大納言殿に時服五、銀五十枚。御台所に縮緬廿卷、二種一荷。簾中御方に縮緬十卷、二種一荷。正邦より大納言殿に時服六、銀百枚。御台所に銀五十枚、二種一荷。簾中御方に銀三十枚。二種一荷奉り、女房にも若干贈物あり。ところが、竹姫の婚約者、松平久千代はその年の十二月二十六日逝去した。

竹姫七才の宝永七年、京都の有栖川宮正仁親王との婚約が成立し

て、姫が十五才になる享保三年、京都へ入興と決まったのであったが、今度の縁談もうまく行かなかつた。享保元年十月七日、有栖川宮は十三才になった姫をあとに薨去したのである。実紀には次の如くある。

七日、有栖川二品正仁親王薨せられしかば、竹姫の御かたに森川出羽守俊胤御使して存問せらる。この御かた、これよりさき親王に許嫁ありし故なり。

吉屋信子の『続徳川の夫人たち』によると、二度も婚約者に先立たれた姫との婚約は諸大名の敬遠するところとなつて、以後の縁談は極めて困難になつたとある。ありそうなことである。官が薨去した享保元年は八代將軍吉宗が紀州より入つて將軍家を嗣いだ年であつた。竹姫はそのまゝ年老いて二十才をはるかに超えて行く。漸く姫二十六才の享保十四年吉宗のはからいで、姫は薩摩の藩主島津継豊（松平大隅守）の後添えとして嫁ぐことになつて、姫にもおそすぎた春がやつて來た。

貴族階級の娘は十才前後から十四、五才位で結婚する。中には四、五才の幼女すら珍らしくない。従つて二十才を超えての初婚は極めて稀れである。まして二十六才ではおそすぎる。が、とにかく竹姫の婚儀は成立したのである。この婚儀に、薩摩側の抵抗があつたことはいうまでもない。『続徳川の夫人たち』はその間の事情を興味深く語るが、万更のフィクションではない。

さて娘時代の竹姫へ、何かのついでにいろいろの献上物があつて、文學書の類が散見されるのだが、この時分の上流階級ではどん

な文学書が贈答されたのであろうか。例えば、宝永七年四月十三日の実紀をみると次の如くある。

所司代松平紀伊守信庸参府により、主上より歌仙手鑑、仙洞より薫物。女院より末広。新女院より三部抄。大准后より近江八景画卷。御台所には禁裡より伊勢物語。仙洞より自讃歌。女院より手巾架。新女院より匂袋。大准后より百人一首なり。

歌仙手鑑、三部抄（定家の詠歌大概、秀歌之体大略、百人一首）、伊勢物語、百人一首がみられるのである。同じく宝永七年六月一日の条には次の記事がみえる。

小笠原佐渡守長重致仕の謝として、来国光の差添。高麗井戸の茶碗を献ず。御台所には世尊寺定盛筆の古今和歌集。瑞泉院御方に二条中納言為重卿筆の伊勢物語。竹姫君に四条参議隆重卿の詞華集。御部屋の方には飛鳥井大納言雅親卿筆の百首和歌なり。

とあって、古今集、伊勢物語、詞華集、百首和歌がみえて、文学書が贈答本の主要な地位を占めている。そしてこんな場合の贈答本の装幀が贅をつくしたものであった事も容易に想像される。名ある公卿の手跡、工夫を凝らした料紙、金銀の砂子、雲母を散らした色紙、豪華な或いはエレガントな下絵の数々といったものから、それらを収める金蒔絵の箱といった工合である。公卿のアルバイトが、これらの豪華本や色紙の揮毫に多くをあてられていたこともまた事実である。木活字の光悦本も貴顕紳士の間の贈答に注文を受け、かなりの需要があったわけである。

前記の小原笠佐渡守が献上した宝永七年は竹姫と有栖川宮との婚

約が成立した年で、姫七才であるが、佐渡守は姫に詞華集を差し上げていた。このあと姫八才の正徳元年二月十一日の実紀には次の如くある。

京の御即位御元服により云々。この日女房もて養仙院御方に桧重、鯛、竹姫君に百人一首、伊勢物語つかはさる。これはこのほど居所修理あるをもとせたまふなり。

また翌正徳二年三月二十三日、竹姫九才の折には尾張中納言吉通卿から絵巻物が贈られている。百人一首は競技用、絵巻物を見て楽しむものであったにしても、まず広義の文学類に入れてもよいであろう。

竹姫二十六才の享保十四年になると、六月以降島津家との婚儀関係記事が有徳院殿（吉宗）実紀巻二十九に続々とあらわれる。順を追って抜き出してみよう。

六月四日 竹姫御方を松平大隅守継豊に御再醮仰出さる。松平左近将監乗邑、少老本多伊予守忠統その事つかさどるべしとなり。よて今朝紀水両邸には宿老御使して其旨をつたふ。尾張黄門は在封なれば駆伝せらる。

六月五日 竹姫の御方降嫁仰出されしをもて、三家、溜詰、雁の間詰、並に布衣以上の諸有司出仕して賀し奉る。其外万石以上並に幼稚致仕のともがら、直月老臣の宅に使奉り、在封は飛札もて賀し奉る。

六月十八日 松平大隅守継豊こたび降嫁の仰蒙りしにより、税額百分一を収め国用をたすくる事をゆるさる。

六月廿一日 松平大隅守継豊降嫁を謝し奉りて、銀五十枚、縮緬二十卷奉る。雑煮餅御盃下され、貞宗の御刀を賜ふ。西城にも銀巻物を献じ、のしあはびを下さる。

七月廿一日 竹姫の御方降嫁により、家々より調度奉るべき旨、万石以上に仰下さる。

吉宗直々の指揮による婚禮は大事件であり、老中松平左近將監乗邑が万端取りしきるのだから大変である。天下をあげての婚禮である。七月二十一日の万石以上の大名に対する調度品献上の命令をみても吉宗の力の入れかたが窺われようというものである。とりあえず、綿や反物を献ずる者が出て来る。各大名や幕臣達はきそって献上調度の作製に着手する。閏九月二十二日頃からの実紀には、出来上り次第に献上される器物の類がみえて来る。例えば

十一月三日 此日榊原式部大輔政祐弁当箱を奉る。御入輿の御調度なり。

十一月七日 御入輿の事により、毛利主水師就より曾我物語を献ず。

などとある。榊原式部大輔献上の弁当箱は、

「御弁当御膳共村梨子地御紋ちらし黒塗、中高蒔絵、若竹之模様」であるし、毛利主水の献上した曾我物語は、目録に

曾我物語 一部箱入、蒔絵なし、地黒ぬり、御紋ちらし 毛利甲斐守

とあるものであった。

吉宗自身がこの婚儀に寄せる熱意はなみなみでない。度重なる儉

約令、特に享保十四年のこの十一月には幕臣に改めて儉約令を下しているのである。彼自身の衣服、食事も極めて粗末であった。玄米食に野菜料理、冬も下着は木綿、馬乗袴も木綿小倉織だったと伝えられる。こんなきびしい儉約の中にも竹姫の婚儀には、出来る限りの豪華版を考えているのだから、吉宗の竹姫への思いやりが並々ならぬものだと容易に想像される。この文の終りに列挙したかった献上品目録をみても、あのきびしい儉約令のさなかによくもこれだけの豪華な調度かと驚嘆せずにはおられない。

吉宗は十一月五日、黒木書院で、各家々から献上の調度品を検分しているが、更に十三日にも入輿の調度を検分している力の入れかたである。十一月十四日には用人遠山久四郎、酒井与一郎を執事として島津家への陪従を命じ、官料五百俵を下賜している上に、寄合医津軽松庵にも陪従を命じている。

十一月十九日には、儉約令が出て、

すべて近年奢侈の風習にそみしより、人々の衣食をはじめ嫁娶の礼、親戚の会宴、または直廬に持出す行厨など、これまでののならはしあるよしにより、所屬あるものは官長より心そへて省減を加へしむべし。家居の経営を堅緻にするも、火をふせぐたよりとなすはさる事なれど、観美を設る事はあるべからず。徒若党の衣服は布木綿をまじへ用ゆべし。すべてさきさきの令にしたがひ、儉素を守り、家事をととのへ、奉公おこたらざるをむねとすべしとなり。

と誠めているを考えると、竹姫の場合は全く異常である。

十一月廿一日 御入輿近きにより、竹姫の御方に三條吉家の御太刀、大和国包永の御刀、盛景の御差添、晨明雲井と名づけし茶壺二、伽羅七木、紅白縮緬五十卷、紅白紗綾五十卷、金三千両、米五百俵を贈らせらる。

ということなり、挙式当日の供奉として大久保下野守忠位以下の者がこれを命ぜられた。更に三十日には挙式当日の見送りが決定して次のような派手やかな手筈が調う。

けふ仰出されしは、明の月十一日、竹姫御かた松平大隅守継豊がもとに御入輿あるによて、其日庖所前には、御膳奉行、賄頭、奥右筆、台所頭、同朋頭、長屋門内に此事にあづかりし勘定、玄関前には溜詰、商家、雁間詰、奏者、菊の間縁頼詰父子、芙蓉の間伺公の輩、三番頭、新番頭、中奥小姓、同番士、表右筆、かつ林大学頭信篤父子、中門内外には布衣以上の諸有司、下乗橋は譜代衆、大手内桜田の番所にさむらひて、御輿わたらせ給ふ時、橋辺に列居して拝し終り出仕すべし。西城の諸有司もこれに同じ。みな無地熨斗目半袴を着すべし。諸番士は本日、翌日服紗小袖麻上下を着すべし。其他は家にあり。門扉を立てて外に出る事あるべからずとなり。万石以上も以下も大門をとざし、小戸のみ明置。長屋は窓蓋に及ばず簾をかくべし。朝とく家士出し門外を警衛し、渡らせ給ふとき引退き手桶をば備置べし。いづれも家の士、それぞれの格服を着し、足輕は羽織を着せしむべし。家士門内に引入しあとは、徒士等門外を警衛すべし。十五才以上の男は道途に出る事を禁せらる。女子は出て御行装を拝観する事をゆる

さるべしとなり。

いよいよ婚礼荷物送りが始まった。

十二月三日 けふより三日の間、竹姫の御方の御調度を松平大隅守継豊の邸におくらす。よて上直の群臣みな麻上下を着す。今より後同じ御かた第宅近き地に火あらば、三家に准じて事はからふべし。又増上寺あたり火災の時は、風道を見はからひ、二隊をつかはすべしと火消役に仰下さる。

調度を運ぶのに三日がかりである。今後薩摩邸近くに火災発生のみぎりは御三家に准じて消防せよというわけである。

献上本、嫁入本に直接の関係はないが、近世における最高の婚儀の一つともみられるので、当日の記録もみておくことにする。

十二月十一日 竹姫の御方御出輿により、御迎として阿部伊勢守正福今朝とくより出仕す。御道は桜田虎門より、土器町赤羽根を経て、松平大隅守継豊が邸に導き進らす。左右に徒士六人、次に目付山岡五郎作景久、徒頭朝岡鞆負方喬、次に徒目付左右に一人づつ、次に副輿、左右に徒士四人、次に貝桶、次に女房乗物四、左右各徒士そふ。次に同朋、次に挾箱、次に墓目、弓、長刀、次に小十人頭曾我七兵衛助賢、山岡源右衛門景熙左右に立。徒頭梶川三之丞忠栄中にたつ。次に小十人組頭、次に目付石河九郎政朝、大岡右近忠征、次に御輿渡しの後、松平左近將監乗邑、貝桶の役酒井讚岐守忠音、次に護刀広敷番の頭これをもつ。つぎに添番侍十人。次に広敷番の頭二人、御輿後に用人遠山久四郎安速、留守居番石原勘左衛門安種、次に日傘、次に留守居大久保下野守忠

位、諏訪若狭守頼秋、次に太刀箱、次に医員、次に用人本目権左衛門親良、留守居番末高半左衛門政峰、次に添番三人、次に目付松前主馬広隆、次に少老本多伊予守忠統、次に大番頭小堀備中守政峰、組頭番士これにしたがふ。つぎに傘輿立、茶弁当、茶道坊主、次に挾箱、次に大目付興津能登守忠閭、次に徒目付二人、次に番頭小笠原縫殿助持広、女房の韓乗物十六、次に目付北条新藏氏庸、次に徒目付、おなじ組頭、小人目付、使の者、徒押、惣供小人押、次に目付本多弥八郎正庸、次に徒小人の目付、おなじく押、かしこにては島津但馬守忠雅御乗物を受取。鳥居丹波守忠貞貝桶を接触し、婚礼事はてて供奉の輩みな出仕し、布衣以上には酒吸物を賜ふ。又目付使番へ東叡三縁両山のあたり火変ある時は、使番一人とくまかり、風筋を見はからひ注進すべし。養仙院御方、竹姫御方第宅のほとり火ある時もこれにおなじかるべし。右の行列次第で竹姫の入輿は終った。

十二月十二日 三家はじめ、布衣以上の諸有司、寄合出仕して、きのふの嘉礼を祝し奉る。万石以上は使もて賀物をささぐ。松平大隅守繼豊のもとに、留守居番戸田喜右衛門忠位御使して、五百八十の餅、十種一荷を賜ふ。大隅守繼豊よりは家老島津中務もて五百八十の餅、ならびに塩鯛三十、塩鱈五十、塩鰯三十、塩鮭三十、干鱧九十、鯛五十、連鱧子七頭、干鱈三十、熨斗鮑三十把、昆布三十枚を献ず。中務には酒羹下され、紗綾五巻をかつけらる。松平左近将監乗邑、少老本多伊予守忠統このことをつかさどりしをもて、乗邑に時服十、忠統に賜ふ。

十五日は島津繼豊、その父吉貴、嫡子益之助よりいろいろの献上物をする。

十五日松平大隅守繼豊見参したてまつり備前国正恒の太刀、銀百枚、巻物三十、白糸百斤を献じ降嫁を謝しまいらす。父上総介吉貴は阿部伊勢守正福を名代として、来国秀の太刀、金十枚、巻物二十、綿五十把を献ず。島津但馬守忠雅、鳥居丹波守忠瞭も銀馬代もて拜謁す。繼豊が家司等までみな銀馬代もて拜し奉る。繼豊かさねてめされ、御盃に正宗の御刀、来国行の御さしぞへを下さる。繼豊の嫡子益之助よりも、使もて太刀、金馬代、縮緬十巻を献じ、包永の御刀を下さる。忠雅、忠瞭にも巻物五つづを賜ふ。吉貴かさねて使奉り、二字国俊の刀、行光のさしぞへを献じければ、来国光の御さしぞへを下さる。其妻より縹紗二十巻、樽二荷三種、正福妻より縹紗五巻、一種一荷を献ず。ことばてて後繼豊西城に出仕し、大納言殿よりも御手づから熨斗鮑を下さる。竹姫の御方御迎には、留守居番石原勘左衛門安種参る。又姫君に女房して縮緬十巻をつかはされ、西城よりも紗綾十巻ををくらせらる。同じ御入輿の事うけつかふまつりしものに褒行はる。留守居大久保下野守忠位、勘定奉行駒木根肥後守政方に時服四、新番頭小笠原平兵衛常春金二枚、時服二、納戸頭松平左源次康春、武島左門茂孫に時服二つづ。その以下の諸職ものたまはる事若干なり。翌十六日、島津繼豊は中将にあげられた。竹姫はいわゆる里帰りをしたので、三家から鮮鯛の献上があった。

十九日には竹姫降嫁の祝いとして猿樂が催され、三家はじめ、群臣一同拜観を許されるのであった。能は翁、三番叟、高砂、八島、東北、張良、祝言呉服。狂言は二番で、末広がりといくるが上演された。

二十一日には万一の火災にあたっての警備と避難の指令が下された。

けふ目付に仰下されしは、竹姫御方第宅のほとり火あらば、大隅守継豊が高輪の別墅か、幸橋の邸、または浜の御殿、寿光院の宅に火をさけ給ふべし。もし其地も火道にかからば、麻布湖雲寺、渋谷浄雲寺、其外にも便宜の寺院にしばしやすらはせ給ひやがて彼の四邸のうちにつらせ給ふべし。あらかじめ其心して沙汰すべしとなり。
全くもって至れりつくせりである。

三

高山市塩屋町円徳寺に、竹姫の嫁入りに際して三家始め諸大名、役人一同より献上した祝品の総目録がある。同寺にこれがある経過は明らかでないが、目録は次のような表紙ではじまる。

享保十四己酉歳七月廿一日被仰出

竹姫様

上 就御入輿御献上物之覚

伊藤弥二郎兵衛

二百七十人からの献上物は、目録をみてもその豪華さが想像され

る。ただあまりに膨大な品目なので、別の機会に発表したい。さてその沢山の献上品のうち、文学関係の祝品を次に抄出してみ

大名の部

- 一、源氏一部 狭衣一部
- 二品共ニ箱黒塗村梨子地御紋ちらし中高蒔絵
有馬中務大輔

- 一、東鑑一部 管黒塗村梨子地御紋ちらし中高蒔絵
松平隠岐守

- 一、廿一代集 箱黒塗村梨子地御紋ちらし中高蒔絵
松平丹波守

- 一、盛衰記一部 箱黒塗村梨子地御紋中高蒔絵
中川内膳正

- 一、栄花物語一部 黒田甲斐守
- 一、太平記 箱入 箱黒塗村梨子地御紋中高蒔絵
鍋嶋加賀守

- 一、曾我物語一部 箱入 蒔絵なし地黒ぬり御紋ちらし
毛利甲斐守

- 一、歌かるた 箱黒塗村なし地中高蒔絵若竹之模様
大久保長戸守

役人の部

- 一、つれづれ草一部 百人首
- 両品共箱黒ぬり村梨子地御紋中高蒔絵

酒井隠岐守

一、伊勢物語一部 古今集一部

二品共箱黒ぬり村梨子地御紋中高蒔絵

仙石丹波守

以上である。調度品総目録をみると、十一月二十一日、水野和泉守が竹姫側の使者として三条吉家の太刀以下金子三千両、餅米五百俵等を島津家へ持参した時、特別に吉宗の意を受けた安藤対馬守が、次の品々を贈与している。

一、源氏 公家衆寄合書 一部

一、綿 百把

一、箱肴 一種

右の公家衆寄合書の源氏物語は特に吉宗が心をこめた贈物だったにちがいない。

文学関係の献上本をみても、あらゆる調度品の目録をみても、さほどの重複がない。これは七月二十一日、竹姫の婚礼調度品の献上を万石以上の諸大名、役人衆へ布令したみぎり、大体必要な調度品の予定目録を作り、大名や諸役人の伺いに応じて注文したからであろう。何しろ老中松平左近将監乗島が婚儀総指揮官なのだから、大名から何を献上したらよかろうかとお伺いをたてるのに対し、貴殿はこれ、貴公はあれといった工合の大よその注文振分けが希望されたいに違いない。なかにはお伺いをせずに自分の存念で献上品を決めた向きもあったにちががなく、布令直後に早々と献上した連中の品物を見ると綿とか反物、それもいつでも入手出来そうなものがみえ

る。

こんな工合で幕府はぬかりなく調度品を準備出来たのであろう。手のこんだ細工物も七月末から十一月末まで四カ月もあれば、いわゆる金に糸目をつけず、大名の威光で完成するに違いない。

名古屋の徳川美術館には重要文化財、初音の調度がある。寛永十六年、三代將軍家光の長女千代姫が、尾州第二代光友へ嫁いだみぎり持参した婚礼調度である。総点数六十余点は当代最高の芸術品で三年がかりで製作されたものである。しかし初音の調度は幸阿弥十代長重の手になるものだから、その一門をあげても三カ年の日時を要したであろうが、竹姫の場合は、京江戸はもとより全国の名工が腕をきそったものと思われるので、三カ月乃至四カ月をかければ一応調ったものであろう。

抄出した文学書の類は写本もあるだろうし、古活字本も、特別の料紙に刷らせた版本もあったかと思われる。最高の装幀を施し、最高の箱に収めたことは充分に察せられる。中高蒔絵の箱は全部、葵の紋を散らし、あるいは竹姫ゆかりの若竹模様が画かれている。

以上をまとめてみると、竹姫の場合、その娘時代に贈られた文学書も嫁入本として調えられた文学書もさほどの差はなく、源語、勢語にはじまって極く常識的に選ばれるであろうと思われる物語、歌集などが多いということである。そこへ行くと松平隠岐守の献本、東鑑などは少々毛色の変ったものの一つであろう。盛衰記、栄花物語、太平記などは読んで面白いという点もあろうし、量的にも多いので如何にも差し上げましたという計算もあるかと思う。残念なの

は書籍を入れる外箱の外装のみが麗々しく、こまごまと記録されているだけで、装幀には一言もふれてないことである。私共の観点からすれば、やはり料紙、綴様、写版の別、筆者、挿絵の有無といった書誌学的な面が知りたいが、見た目に綺麗で、ある程度の量感があって、収める容器の美しさが先立つという通俗的な記録者にそれ以上を求める方が無理かも知れない。勿論献上する方も内容の選別より飾り本としての方に重点を置いたのであろうから、その点古今東西似たようなものであるという、これも極めて常識的な結論に帰着するようである。

私の興味は、こうした表に現われた嫁入本の外に、近世の上流、中流の娘達が嫁入りに際して持って行ったであろう女訓物、実用的な書物の数々、興味本位の読みもの等にむけられるのであるが、その方面はもっと調べてみる必要がある。近世のいわゆるかくれたベストセラーという研究も試みられるべきであろう。

最後に言わなくてもがなの事かも知れないが、収録した竹姫の婚礼調度献上目録の中で、ただ一人、松平宮内少輔の項に「献上物なし」という付箋がついている事である。その理由は書いてないが、当時のやかましい儉約令の中で、竹姫の婚儀にだけ特例をもうけようとした吉宗へのレジスタンスか、本当に儉約令に忠実な正直者の手本を示したのか、それとも何かの理由があったのか、小説的推理は尽きないが、理由と結果については今のところ何も判っていない。七月二十一日入輿について献上品を仰せ出されてから、実紀をみると閏九月、十月は献上品の届出が続々とある。十一月になると五日、

十三日の両度にわたって吉宗自身、献上品の検分をしているありさまである。十二月十一日の入輿は天下を挙げての大事件であった。その間いろいろの噂も耳に入るに違いない。松平宮内少輔の家臣達も随分気をもんだことであろう。その中で毅然として献上品を呈出しないのは非常な勇気を要することだったと思う。